特集：ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

オスカー・ワイルド「カンタヴィルの幽霊」に描かれた「アメリカ」——公爵夫人となった少女ヴァージニアをめぐって

輪湖　美帆

1. 序

オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）の短編「カンタヴィルの幽霊」（‘The Canterville Ghost: A Hylo-Idealistic Romance’ 1887; 1891）の中にイギリスとアメリカとの対比を見ることは比較的容易である。カンタヴィル屋敷に憑く幽霊の存在を信じるイギリスのカンタヴィル卿（Lord Canterville）と、その幽霊を家具の一部のように見なし、屋敷を購入するアメリカのハイラム・B・オーティス氏（Mr. Hiram B. Otis）との対比に始まり、「真の芸術家」（‘the true artist’）（87）として16世紀以来様々な恐ろしい役を演じ、住人に恐怖や死をもたらしてきたイギリスの幽霊サー・サイモン・ド・カンタヴィル（Sir Simon de Canterville）と、幽霊の残した血痕を、しみ抜きや洗剤を使って取り除き、幽霊が身に着ける錆びた鎖に、注油器を勧めるアメリカのオーティス家など、物語中で描かれる英米の対比の例を挙げればきりがない。そしてそこに見られる対比は、伝統や歴史、文化を持つイギリスと、商業主義、消費主義、合理主義的なアメリカという構図であることは、容易に見て取れる。

こうした英米の二項対立にまずは注目する批評は枚挙に遑がない。例えばボブ・ニコルソン（Bob Nicholson）は、アメリカの「全能のドル」（‘almighty dollar’）をもってすれば、「ヨーロッパの歴史の最も貴重な称号や芸術品を確保できる」が、イギリスの文化と伝統に根差した「美意識」（‘taste’）を買うことはできないことをこの物語が示唆していると主張する（157）。また、ミシェル・メンデルソン（Michèle Mendelssohn）も、「ワイルドが、この物

語の中心にアメリカの飽くなきプラグマティズムと貴族的なイギリスの迷信の対比をおいている」と指摘している（167）。だが、この物語に描かれるイギリスとアメリカとの境界線は、実のところ曖昧なものだと言える。そのことを示すために、本稿では、この物語に描かれるように見える両国の対比的なイメージ――それは当時流通していたイメージとも言えるのだが――を示す際、〈イギリス〉（歴史や伝統、文化や美意識を持つとされる）と〈アメリカ〉（商業主義、消費主義、合理主義と結びつくとされる）と表記し、そうしたイメージから外れたところでこの物語が描くアメリカを「アメリカ」と表記したい。この物語における〈イギリス〉と〈アメリカ〉的イメージの境界線の揺らぎとしては、例えば幽霊は、オーティス氏に勧められた「タマニー朝日注油器」（‘the Tammany Rising Sun Lubricator’）（Wilde, ‘Canterville,’ 86）を使うことを最初は屈辱と見なしたが、物語中盤ではその良さを認めているし（92）、娘のヴァージニア・E・オーティス（Virginia E. Otis）は最終的にイギリスの幽霊に救済としての「死」をもたらした上で、（幽霊サー・サイモンの遠縁にあたる）イギリス貴族のチェシャー若公爵（the young Duke of Cheshire）と結婚している。そうした点に注目した時、この物語においてアメリカはそれほど単純なイメージで描かれていないことが明らかになろう。特に娘のヴァージニアは、後述するような、当時イギリスで揶揄されたアメリカ人女性の特徴――持ち前の率直さと自信、および豊富な財力でイギリス人女性を圧倒し、イギリス貴族の妻の座を得ていくというイメージ――を体現していながら、絵を描き、幽霊の語る話に耳を傾け、芸術に対しても理解を示すという、〈イギリス〉的要素も併せ持った存在として描かれている。したがって本稿では、アメリカの少女ヴァージニアに注目することで、ワイルドが当時流通していた〈イギリス〉的イメージや〈アメリカ〉的イメージを意識的に利用しながら、一見対立するように見える両国のイメージを乗り越え、結びつける一つの例を提示していることを指摘したい。そしてその背景には、当時イギリス国内に見られた、消費主義や物質文化と唯美主義との対立も隠されており、その結節点にヴァージニアがいることの意味も、本稿では考察したい。

2. アメリカの〈侵略〉？

ワイルドは「カンタヴィルの幽霊」を発表した1887年の同じ月に、本作が掲載された『コート・アンド・ソサエティ・レビュー』誌（*Court and Society Review*）に「アメリカの侵略」（'The American Invasion'）と題するエッセイを発表している。そこでは、ワイルドはイギリスの社交界に出入りするアメリカの女性の特徴として、聡明で国際的なことに加え、「魅力的な生意気さ」、「愉快なうぬぼれ」、そして「生来の自己主張の強さ」があること、イギリスの貴族社会や爵位に憧れを持っていること、「生まれつきの性質、および受けた教育の両方の点から、男性を楽しませる力が巧みである」こと、などを挙げている（964）。そしてアメリカの若い女性たちの明るさがイギリスの退屈な晩餐会で歓迎され、しばしば彼女たちがイギリス貴族の妻の座を得ることもあるとし、こうした「アメリカの侵略」は最も重要で喜ばしい「ロンドンの社会革命」の1つだと評している（966）。

こうした、イギリス社交界を席捲するアメリカ人女性、特にイギリスを含むヨーロッパの貴族との結婚を目指す裕福なアメリカ人女性のイメージ――言い換えれば「アメリカの侵略」は決してワイルド独自の考えではなく、当時の言説空間で流通しているものであった。例えば、アン・デカーシー（Anne De Courcy）は、こうしたアメリカ人女性の存在は、1880年代当時も「侵略」（'invasion'）とみなされていたことを指摘する（1）。デカーシーの紹介する、『パンチ』誌（*Punch, or the London Charivari*）の1881年の年鑑では（2）、ニューヨークの裕福な娘たちが集まり、神妙な顔をして書物に向かっている姿が描かれる（Fig. 1）。

> New York Millionnairesses about to start for Europe. They are studying—not Murray and Baedeker—oh, dear, no!—but Burke and Debrett, and taking note of all the unmarried Peers. Clara van Deepenbeck. "WHAT A PITY THEY DON'T PUBLISH THEIR PHOTOGRAPHS AS WELL AS THEIR AGES AND TITLES!" ('New York')

彼女たちはヨーロッパに赴く際、マレー（'Murray'）やベデカー（'Baedeker'）という当時有名だった現地のガイドブックではなく、バーク（'Burke'）やデ

Fig. 1. 'New York Millionnairesses . . .' in 'Punch's Almanack for 1881' 13 Dec. 1880. *Punch.* Vol. 80. (London, 1881; print; n. pag). 中央大学図書館所蔵。

ブレット（'Debrett'）といった貴族年鑑を読み込み、未婚の貴族を確認していたという風刺画である。批評家のアリソン・アドバーガム（Alison Adburgham）は、この絵を評して 'It was the beginning of the American Invasion'（132）と説明する。他にも1888年の『ファン』誌（*Fun*）に「アメリカの侵略」（'The American Invasion'）と題された記事が掲載されており、そこでは、アメリカの女性が「大量にロンドンに押しかけ」、結婚市場を席捲していることが説明され、それに続き「メロディ――ヤンキー・ドゥードル」（'Air—Yankee Doodle'）という、18世紀にイギリス軍が、アメリカ人を揶揄して歌ったとされる歌のパロディとなる詩[1]が載っている（38）。その替え歌では、アメリカの女性たちが、「威厳があり」、「賢く」、「陽気」で、独身男性の人気を集めていること、その財力により（見栄は張りつつ）行動も堂々としており「イギリスの女性たちがアメリカの侵略に嘆いている」（'Till English girls are pining at American Invasion.'）（'American,' 38）ことがつづられている。したがってイギリスの社交界に、裕福なアメリカ人女性が「侵略」をしているというイメージは、ワイルドの「カンタヴィルの幽霊」

が発表された当時の英米において、ある程度共有されていたものと言えよう[2]。

また、ワイルドがアメリカの女性のイメージとして挙げていた聡明さや「生来の自己主張の強さ」(Wilde, 'American,' 964) といったものが、上記の『ファン』誌の記事に描かれるイメージと共通することも重要である。当時のヨーロッパの上流階級から見ると、アメリカ人女性の魅力とは、「無垢」と「媚び」(財力や育った環境から、自信を持ち、異性とも交流し慣れているという意味と定義されている) の「絶妙な組合わせ」であったことを新井潤美も指摘している (112-16)[3]。

ここで改めてオーティス氏の娘ヴァージニアに注目すると、上記で見たような当時のアメリカの若い女性のイメージが付与されていることがわかる。まず彼女は、カンタヴィル屋敷を買えるほど裕福なアメリカ家庭の15歳の娘である。彼女はまた、しなやかさと愛らしさ、品ある自由さも持ち合わせており、老ビルトン卿 (old Lord Bilton) とポニーに乗って競争をして勝ったことで、チェシャーの若公爵にその場で求婚をされ (Wilde, 'Canterville,' 83)、物語の終盤この公爵と結婚して公爵夫人となっている。物語上では、この二人の結婚を祝福しない数少ない人物としてダンブルトン老侯爵夫人 (the old Marchioness of Dumbleton) の名が挙がるが、その理由はダンブルトン侯爵夫人が、自分の娘を若公爵と結婚させようとしていたためだという (104)。したがってヴァージニアには、当時皮肉的に語られていた、イギリス社交界における裕福なアメリカ人の女性に付された言説が多分に反映されていることが読み取れよう。

だが一方でヴァージニアは、同時代の言説で揶揄されていた〈アメリカ〉のイメージを、注意深く避けた存在にも読める。デカーシーによれば、こうした結婚が行われ注目された時代背景として、1873年頃から見られた、大不況に伴うイギリス貴族の弱体化があるという (4-6)。すなわち、穀物の不作や、労働力が都会に流入するにつれて特に地方での労働力が不足し、地主の立場が弱くなったことに加え、アメリカから大量の穀類が入ってくるようになったことで、イギリスの穀類の値段が半減し、貴族を含む地主の収入は大打撃を受けた (De Courcy 5-6)。それにより経済的に苦しくなったイギリスの貴族たちは美術品等を売るという手段に出たが、もう一つの

活路として、ドルの持参金を持つアメリカ人女性との結婚があった（6-7）。デカーシーによれば、アメリカの女性側にも事情があった。すなわち、ニューヨークの社交界は、オランダ入植者たちの子孫が閉鎖的なコミュニティを形成し、ある種の階級を築いていたという（7）。その社交界に入ることを望む新興成金の、特に女性たちが、娘をイギリスの貴族と結婚させ、貴族の親戚となることで、ニューヨークの閉鎖的な社交界に受け入れられることを目指したのだという（De Courcy 7）[4]。こうした時代背景と照らし合わせると、オーティス家とカンタヴィル家は必ずしもこの型通りではないことがわかる。すなわち、ヴァージニアの父オーティス氏は、若公爵を高く評価しつつ、‘theoretically, he objected to titles’（Wilde, ‘Canterville,’ 104）という理由で最初二人の結婚に反対する。すなわち、〈アメリカ〉のイメージの象徴のように見えるオーティス氏は、同時代に揶揄された、娘が貴族と結婚することで得られるステイタスに価値を置かない。また逆に、カンタヴィル卿が自身の屋敷を売る理由も、屋敷が幽霊に憑かれていたからであり、決して経済的困窮によるものではない。さらには、若公爵がヴァージニアと結婚を望む理由はあくまでも愛であり、経済的な理由は描かれない。

したがって、本物語における「アメリカ」のイメージは、同時代の言説で流通していたイメージを多分に反映しながらも、注意深くその特色から「ずらされて」いることがわかる。次節では、この物語になぜこのような「ずれ」が生じているかについて検討したい。

3. 女性唯美主義者としてのヴァージニア

ここで、強大な経済力を背景に、イギリス貴族と結婚をするアメリカ人女性とはまた別の特徴がヴァージニアに付されていることに注目したい。すなわち、ヴァージニアは、芸術や歴史、伝統――言い換えれば、この物語で描かれる〈イギリス〉的なものに理解を示し造詣が深い人物として描かれているのである。

第一に、ヴァージニア自身、絵を描くハイアートの実践者として描写されている。幽霊のサー・サイモンがオーティス家を驚かすべく連日残していた血痕は、実はヴァージニアの絵の具であったことが物語中明かされる

が、その際彼女は、幽霊が赤と朱を持って行ったために夕日が描けなくなったこと、その後藍色と白しか残されず月夜しか描けなくなったことについて幽霊を責めている（Wilde, ‘Canterville,’ 96）。また彼女が幽霊には眠ることができる場所がないのかを尋ねた際、幽霊は詩的あるいは演劇的な回答をするが、その真意をヴァージニアは瞬時に理解する。

> ‘Far away beyond the pinewoods’ . . . ‘there is a little garden. There the grass grows long and deep, there are the great white stars of the hemlock flower, there the nightingale sings all night long. All night long he sings, and the cold, crystal moon looks down, and the yew-tree spreads out its giant arms over the sleepers.’
>
> Virginia’s eyes grew dim with tears, and she hid her face in her hands.
>
> ‘You mean the Garden of Death,’ she whispered.（97）

その後も、幽霊を救うための鍵となる、‘When a golden girl can win/ Prayer from out the lips of sin,/ . . . a little child gives away its tears,/ Then shall all the house be still/ And peace come to Canterville.’（98）という書斎の窓に記された予言についても、ヴァージニアは最初その意味を理解できないと答えるが、彼女が幽霊の罪のために共に泣き、彼の魂のために祈れば、幽霊は「死の天使」の哀れみを得ることができるのだ、という幽霊の解釈を受け入れ、「死の天使」に哀れみを請いに幽霊と異世界に旅立つ（98-99）。すなわち、ヴァージニアはハイアートの実践者として、また詩的な文章を理解できる人物として、或いはその意味が理解できない時も、〈イギリス〉的な幽霊と対話し、その言葉と解釈を信じられる人物として描かれているのである。

ヴァージニアが、この物語における〈イギリス〉的要素ともいえる性質を持つ理由として、彼女がロンドン生まれであることが言及されるが、同場面からはさらに興味深いことがわかる。ヴァージニアが異世界で幽霊に救いをもたらした際、彼女は幽霊から、16世紀の‘a certain ruby necklace with old Venetian setting’（Wilde, ‘Canterville,’ 102）を含む宝石の入った箱を受け取る（101-02）。オーティス氏は、この宝石は高価すぎて娘が受け取るべきものではなく、そもそも宝石自体がイギリスの貴族だけが好む ‘all

such vain gauds and toys'（102-03）であるとして、宝石をカンタヴィル卿に返還しようとする。その際、箱だけは幽霊の形見として手元に残したいという娘の願いを評して、オーティス氏は次のように言う。

> For my own part, I confess I am a good deal surprised to find a child of mine expressing sympathy with mediaevalism in any form, and can only account for it by the fact that Virginia was born in one of your London suburbs shortly after Mrs. Otis had returned from a trip to Athens.（Wilde, 'Canterville,' 103）

ここで注目したいのは、オーティス氏が、娘のヴァージニアが中世趣味に共感していることに驚いている点である。中世趣味といえば、ジョン・ラスキン（John Ruskin）やラファエル前派、ウィリアム・モリス（William Morris）といった初期の唯美主義の一つの中核であった。また同じオーティス氏の発言の中で、ヴァージニアの母親（物語冒頭で、「ニューヨーク美人」として知られたルクレティア・R・タッパン嬢（Miss Lucretia R. Tappan）と紹介されている（83））が、少女時代の冬をボストンで何度か過ごしており、そのため「なかなかの美術の権威」である（103）と描写されることも注目に値しよう。ライオネル・ランボーン（Lionel Lambourne）によれば、アメリカでは主に1870年代頃から、特に室内装飾の分野において、イギリスの唯美主義が受け入れられており（137-41）、特にボストンでは1860年代後半には人々はモリスの壁紙が入手でき、独自の唯美主義が発展していたという（Lambourne 142）。メアリー・ワーナー・ブランチャード（Mary Warner Blanchard）も、ボストンが当時アメリカにおける唯美主義の中心と見なされていたことを指摘するが、ブランチャードによれば、この街は、ボヘミアン的な唯美主義とヴィクトリア朝的礼節といった、「19世紀後半のアメリカ社会、特に女性にとって大きな意味を持つ二つの相反する価値の緊張関係」を孕んだ街でもあったという（169）。すなわちボストンはアメリカと唯美主義、さらには女性という要素が結びつく場所であり、ヴァージニアの母がボストンで「美術の権威」となったことが言及されることで、ヴァージニアは、イギリス貴族と結婚を果たす裕福なアメリカの家庭の娘

としてだけではなく、女性唯美主義者としてのイメージも付されている可能性が見えてくるのである。

ヴァージニアを女性唯美主義者と見なす時、興味深い側面が見えてくる。メンデルソンは、ヴァージニアの母オーティス夫人が（イギリスの「美意識」を理解できる）唯美主義者であること、そしてそれゆえヴァージニアが唯美主義的シンパシーをもって幽霊に救いをもたらし、そのご褒美としてチェシャー公爵夫人となったという重要な指摘をしているが（168）、女性唯美主義者には、唯美主義を、物質文化と結び付けることに寄与したというもう一つ重要な側面がある[5]。女性唯美主義者の重要性を指摘したタリア・シャファー（Talia Schaffer）によれば、ヴィクトリア朝後期に活躍した女性唯美主義者の特徴とは、文学などを通じて「美への愛」や、「言語的実験」を行う存在であることに加え（4）、室内装飾や服飾のマニュアル本などの物質文化を実践していたことだという（31-32）。そうした背景を考慮に入れると、ヴァージニアが受け取ったこの16世紀のルビーの首飾りは、伝統や歴史を負った美術品であると同時に、ファッションアイテムでもあるという事実が前景化してくる。実際、ヴァージニアが結婚するにあたりこの宝石を身に着けて女王に謁見した際、その宝石が話題の的になった様子が描かれている。

> [W]hen, in the spring of 1890, the young Duchess of Cheshire was presented at the Queen's first drawing-room on the occasion of her marriage, her jewels were the universal theme of admiration. For Virginia received the coronet, which is the reward of all good little American girls, and was married to her boy-lover as soon as he came of age.（Wilde, 'Canterville,' 103-04）

ここはもちろん、この宝石が、ヴァージニアの善良さと〈イギリス〉的価値観への共感の象徴となり、彼女がイギリスの社交界に受け入れられた場面と解釈することもできる。だが同時に思い出すべきは、当時公の場に現れる貴族のファッションが、女性雑誌の恰好のネタであったことだ。例えば当時のイギリスで人気だった、女性に向けた定期刊行物『クイーン』誌

（*The Queen, The Lady's Newspaper*, *and Court Chronicle*）は、様々な記事の中で、貴族が着用していたドレスやアクセサリーを事細かに報じているが、「宮中服、女王陛下の応接間で着用されたもの、3月18日」（'Court Dresses, Worn at Her Majesty's Drawing Room, March 18'（1887年））という記事では、ヴァージニアも行なった女王との謁見の場で、誰がどんなドレスや飾りを身に着けていたかが、ドレスの作り手の名前、住所と共にイラスト付きで描かれている（412）。すなわち、上に引用した謁見の場面は、幽霊がヴァージニアに渡したこの宝石が、歴史と伝統を持つ芸術作品という、この物語が提示しているように見える〈イギリス〉的なイメージに結びつく物であると同時に、商業主義や消費主義という、いわゆる〈アメリカ〉的なイメージと強く結びつく、ファッションアイテムでもあることが示される場面なのである。

言い換えるなら、この物語で〈アメリカ〉と結び付けられているように見える消費主義や商業主義というのは、当時のイギリス社会が内包する特徴でもあった。例えばこの物語の中で、〈アメリカ〉的箇所として引用されることも多い、ヴァージニアの兄ワシントン・オーティスがピンカートン社の染み抜きと洗剤を持ち出した時や、オーティス氏がタマニー朝日注油器を紹介する箇所を見てみよう。オーティス家がカンタヴィル屋敷に初めて来た際、居間に血痕と思われるしみがあるのを見て、オーティス氏の息子ワシントンは 'Pinkerton's Champion Stain Remover and Paragon Detergent will clean it up in no time,'（Wilde, 'Canterville,' 84）と言う。そして血痕が消え去ると、'I knew Pinkerton would do it,'（84）と大声で言っている。また、オーティス氏が初めて幽霊と対峙した夜、不気味な音を立てていた手枷と錆びた足枷を見たオーティス氏は以下のように言う。

> 'My dear sir,' said Mr. Otis, 'I really must insist on your oiling those chains, and have brought you for that purpose a small bottle of the Tammany Rising Sun Lubricator. It is said to be completely efficacious upon one application, and there are several testimonials to that effect on the wrapper from some of our most eminent native divines. . . .'（86）

あたかも広告文を読み上げているようなこの箇所はいかにも〈アメリカ〉らしい、と当時の読者の笑いを誘ったのかもしれないが、ここで先述したイギリスの女性向け定期刊行物『クイーン』誌の1887年の広告を見ると、同様のレトリックが使用されていることがわかる。例えば「ローソンの「インペリアル」冷水石鹸」(‘Lawson’s “Imperial” Cold Water Soap’)の広告は、「この石鹸が強さ、耐久性、持ち物を洗う点で優れており、質と安さの組み合わせを求める全ての人が使うべき」と言っていたり、「ルパージュの液状接着剤」(‘Le Page’s Liquid Glue’)の広告は、この商品が「全てを修繕」し、「鉄のように強く、岩のように頑丈」な仕上がりと宣伝したり、「ニーダムの艶出しクリーム」(‘Needham’s Polishing Paste’)の広告では、当商品が様々な金属をきれいに磨くのに「最も信頼できる」こと、また「女王陛下の使用人」に使用されていること等が高らかに唱えられている。「全てを修繕」「最も信頼できる」といったやや誇大広告的な文句、また王室でも使われているという宣伝文句は、ワシントン・オーティスやハイラム・オーティスがしみ抜きや注油器の説明をする際に用いた口調と共通するものがある。つまり、1887年においては、イギリスもまた、この物語で描かれるような〈アメリカ〉的商業主義・消費主義の真っただ中にあり、ワイルドがこの物語の中で意識的に描き出してきたであろう〈アメリカ〉のイメージは、その当時のイギリスの姿にも重なるものなのである。

4. 結：ヴァージニアから『女の世界』誌へ

それでは、ヴァージニアが〈イギリス〉的なものと〈アメリカ〉的な要素とを併せ持った女性唯美主義者として描かれていることには、どのような意味があるのであろうか。メンデルソンは、「カンタヴィルの幽霊」の中で、アメリカの女性が唯美主義の優れた受け手として描かれていることを指摘しているが、それはそうした美意識を理解できず、物質的な豊かさに価値を置くアメリカ人男性に対する、ワイルドの批判を表すものと主張している(168-69)。このメンデルソンの論考は大変重要であるが、ここまで見てきたように、〈イギリス〉的美意識にも多分に物質文化の要素が含まれていたことを考えると、ワイルドの描くヴァージニアの存在に改めて注目することには意味があるだろう。ここで再度シャファーによる女性唯美主義

者の定義に立ち戻りたい。すなわち、女性唯美主義者を定義する際、唯美主義の特徴である「美への愛」は、子供や自然への愛も対象となり、「言語的実験については、禁じられたトピックをずらし（‘displace’）、カモフラージュする目的でエピグラムや古風な表現（‘archaisms’）を使う」ことも含み（4）、また室内装飾のマニュアル本などの物質文化も唯美主義の対象となるという指摘である（31-32）。シャファーによれば、これは、唯美主義そのものを『イエロー・ブック』誌（*The Yellow Book*）に代表されるようなハイカルチャーに結びつく主義・主張から、ワイルドが編集長をつとめた『女の世界』誌（*The Woman's World*）的――物質文化と強い結びつきを持つ――な主義・主張と捉え返すことだという（2, 4, 31-32）。確かにワイルドは編集長就任に先駆け、この『女の世界』誌を、ファッションだけでなく、「女性が何を考え、何を感じるかも扱う」雑誌としたい、と手紙に書いており（‘ . . . we should take a wide range, as well as a high standpoint, and deal not merely with what women wear, but with what they think, and what they feel’（‘To Wemyss’ 297））、文学や芸術と、ファッションの両方を兼ね備えた雑誌を目指していた（‘let dress have the end of the magazine; literature, art, travel and social studies the beginning.’ 298）。彼は同じ手紙の中で、本誌を『クイーン』誌等と差異化することも明言するが（297）、「カンタヴィルの幽霊」発表1か月後の1887年4月に書かれたこの手紙の中に、ヴァージニアが体現していた価値を読み解くヒントがあるとはいえないだろうか。つまり、ヴァージニアは、ワイルドが『女の世界』誌で実現しようとした価値を体現しているという見方ができないだろうか。先にヴァージニアは絵を描くハイアートの実践者だと述べたが、彼女はまた、シャファーの指摘する「禁じられたトピック」を語る際の「言語的実験」も行っているようにも見える。すなわち、物語の最後に夫となったチェシャー公爵に幽霊といた異世界空間での時間のことを聞かれても、‘Please don’t ask me, Cecil, I cannot tell you. . . . He [Sir Simon] made me see what Life is, and what Death signifies, and why Love is stronger than both’（Wilde, ‘Canterville,’ 104）という言葉でその時に起きたことをカモフラージュしている。同時に、ヴァージニアは中世趣味の宝石というファッションアイテムを身に着けており、まさに芸術とファッションの両方を兼ね備えた存在なのだ。ヴァージニアはそれゆえ、

ハイアートから出発した唯美主義が消費主義に飲み込まれていく中で、両者の要素を合わせもちつつ一見対立する二つの要素を橋渡しし、多様なムーヴメントとしての唯美主義を実践する存在なのである。そこには、ワイルドが『女の世界』誌において示したかった芸術と消費主義、物質文化との融合の一つの形が、提示されていると言えよう。

以上のように、「カンタヴィルの幽霊」に描かれる「アメリカ」を、ヴァージニアに注目しながら眺めてみると、この物語における「アメリカ」は、同時代の言説で見られるような、伝統と歴史、美意識を持つ〈イギリス〉のイメージに対比された、商業主義、消費主義的な存在としてだけでなく、〈イギリス〉的な要素も持つ存在として描かれる。さらには、同時代のイギリス社会が自身に内包している要素を持つ存在としても描かれていることがわかる。その中で、この物語は、〈アメリカ〉的と当時考えられていた消費主義と〈イギリス〉的と考えられていた「美意識」（‘taste’）とを結びつける有力な担い手として、ヴァージニアという女性唯美主義者を提示するのだ。言い換えれば、ヴァージニアは、当時流通していた〈アメリカ〉的なイメージと〈イギリス〉的なイメージの境界線を越えるだけでなく、唯美主義におけるハイアートと消費主義との間の境界線を越える、ワイルドなりの唯美主義解釈を体現する存在とも言えよう。

＊本稿は、日本ワイルド協会第46回大会シンポジウム「ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド」（2021年12月11日開催）において口頭発表した「「カンタヴィルの幽霊」が描く〈アメリカ〉――公爵夫人となった少女ヴァージニアをめぐって」の原稿に加筆・修正を施したものである。

注

1　「ヤンキー・ドゥードル」（歌詞は時代により異なる）の起源には諸説あるようだが、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*や『世界大百科事典』によれば、独立革命時にイギリス軍が歌い始めた歌が、ジョージ・ワシントン軍の間で人気になり、やがてはアメリカの国民的歌となったという。日本では「アルプス1万尺お山の上で」で知られるメロディである（‘Yankee’; 岡田）。

2　デカーシーによれば、ニューヨークでは独身の貴族男性のリストを掲載した季刊誌すら出版されていたという（2）。*Titled Americans*というこの季刊誌は、

副題どおり「外国の貴族（あるいは高位の）男性と結婚したアメリカの女性のリスト」であったが、その巻末にはアメリカ人女性と結婚することを望んでいると「思われる」独身貴族のリストが掲載されており、‘A Carefully Compiled List of Peers’ という章題の後に、‘WHO ARE SUPPOSED TO BE EAGER TO LAY THEIR CORONETS, AND INCIDENTALLY THEIR HEARTS, AT THE FEET OF THE ALL-CONQUERING AMERICAN GIRL.’ と副題が付されている（*Titled* 156）。

3　こうしたアメリカ人女性の人物造形はヘンリー・ジェイムズ（Henry James）の『デイジー・ミラー』（*Daisy Miller*, 1878）におけるデイジーにも見られる（デイジーは「無垢」（‘innocent’）であり、「かわいらしい、アメリカ人の浮気者」（‘pretty American flirt’）等と表現される（13））。新井は、デイジーの奔放さはヨーロッパ在住のアメリカ人達からは受け入れられないものであることを認めつつ、当時アメリカ人女性の魅力として見なされた「『無垢』と『媚び』の絶妙な組合わせ」を彼女の中に見ている（114-16）。

4　当時のニューヨークの社交界の閉鎖性と、そこから締め出された、新たに裕福になったアメリカの女性の、イギリス社交界におけるイメージについて詳細は新井も参照（104-16）。

5　メンデルソンも唯美主義が大衆化（‘popularized’）し、その信奉者が、オーティス夫人がいたことのあるロンドンの郊外に数多くいたことに言及している（168）。

Works Cited

Adburgham, Alison. *A Punch History of Manners and Modes 1841-1940*. London: Hutchinson, 1961. Print.

‘The American Invasion.’ *Fun* 25 July 1888: 38. *British Periodicals*. Web. 9 Sept. 2021.

Blanchard, Mary Warner. *Oscar Wilde's America Counterculture in the Gilded Age*. New Haven: Yale UP, 1998. Print.

‘Court Dresses, Worn at Her Majesty’s Drawing Room, March 18.’ *The Queen, the Lady's Newspaper, and Court Chronicle* 2 Apr. 1887: 412. Microform. [Original microfilm held at British Library, shelfmark MFM.MLD45]

De Courcy, Anne. *The Husband Hunters American Heiresses Who Married into the British Aristocracy*. New York: St. Martin’s Griffin, 2017. Print.

James, Henry. *Daisy Miller：A Study*. 1878. *Daisy Miller and The Turn of the Screw*. London: Penguin, 2012. 1-68. Print. Penguin English Library.

Lambourne, Lionel. *The Aesthetic Movement*. 1996. London: Phaidon, 2011. Print.

‘Lawson’s “Imperial” Cold Water Soap by Lawson, Phillips, & Billings, Marsh Soap Works.’ Advertisement. *The Queen, The Lady's Newspaper*, *and Court Chronicle* 5 Feb. 1887: n. pag. Microform. [Original microfilm held at British Library, shelfmark

MFM.MLD45]

'Le Page's Liquid Glue.' Advertisement. *The Queen, The Lady's Newspaper*, *and Court Chronicle* 5 Feb. 1887: n. pag. Microform. [Original microfilm held at British Library, shelfmark MFM.MLD45]

Mendelssohn, Michèle. "Notes on Oscar Wilde's Transatlantic Gender Politics." *Journal of American Studies* 46.1 (2012): 155-69. *ProQuest*. Web. 10 Oct. 2021.

'Needham's Polishing Paste by Joseph Pickering and Sons.' Advertisement. *The Queen, The Lady's Newspaper, and Court Chronicle* 5 Feb. 1887: n. pag. Microform. [Original microfilm held at British Library, shelfmark MFM.MLD45]

'New York Millionnairesses . . .' in 'Punch's Almanack for 1881' 13 Dec. 1880. *Punch*. Vol. 80. London, 1881. n. pag. Print. 中央大学図書館所蔵。

Nicholson, Bob. 'The Old World and the New: Negotiating Past, Present, and Future in Anglo-American Humour, 1880-1900.' *History and Humour British and American Perspectives*. Ed. Barbara Korte and Doris Lechner. Bielefeld: Transcript, 2013. 151-70. Print. History in Popular Cultures 2.

Schaffer, Talia. *The Forgotten Female Aesthetes Literary Culture in Late-Victorian England*. Charlottesville: UP of Virginia, 2000. Print. Victorian Literature and Culture Ser.

Titled Americans A List of American Ladies Who Have Married Foreigners of Rank. 1890. Introd. Eric Homberger. Oxford: Old House, 2013. Print. The Hand-Book Library 2-3.

Wilde, Oscar. 'The American Invasion.' *Collins Complete Works of Oscar Wilde*. Centenary ed. Glasgow: HarperCollins, 1999. 964-66. Print.

——. 'The Canterville Ghost: A Hylo-Idealistic Romance.' *The Complete Works of Oscar Wilde*. General Editor: Ian Small. Ed. Ian Small. Vol. 8. Oxford: Oxford UP, 2017. 82-105. Print.

——. 'To Wemyss Reid.' April 1887. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. New York: Henry Holt, 2000. 297-99. Print.

'Yankee Doodle.' *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. Oxford UP, 1948. *JapanKnowledge Lib*. Web. 20 Aug. 2021.

新井潤美『ノブレス・オブリージュ――イギリスの上流階級』白水社、2022年。

岡田泰男「ヤンキー・ドゥードル」『世界大百科事典』平凡社、n.d. *JapanKnowledge Lib*. Web. 2021年8月20日閲覧。

＊　本稿において、原文が英語の文章が日本語で紹介されている引用箇所は原則拙訳によるが（原文の出典を併記している）、原文があることで説得力が増すと考えられる箇所については、原文のまま引用している。